

中国残留日本人孤児から学んだこと(第1回)

## 異国の父母ー中国残留孤児を育てた養父母たちー

浅野慎一

※兵庫県AALA連帯委員会『アジア・アフリカ・ラテンアメリカ(兵庫県版)』

2017年9月号掲載記事に若干加筆しました。

これから何回かかけて、中国残留日本人孤児(以下、残留孤児)について記事を書かせていただく。残留孤児とは、1945年の日本敗戦の混乱により、中国の地で実父母と死別・離別し、中国人の養父母に育てられ、1972年の日中国交正常化以降まで日本への帰国を果たせなかった日本人の子供達だ。今日、彼・彼女達の多くは日本に永住帰国し、日本で暮らしている。「孤児」といっても、今は既に70歳以上の高齢者である。

さて今回は、残留孤児を育てた中国人養父母について紹介する。

私は2002年～2005年頃、中国で養父母にインタビュー調査を行った。養父母はほとんどが貧しい農民や労働者で、不就学のため読み書きができない人も多い。今は、ほとんどが亡くなり、生きている人は90歳以上だ。

中国人の養父母達はなぜ、どんな思いをもって、日本人の子供を引き取り、育てることにしたのか。二人の養父母の証言を、ごく簡単に要約して紹介する。

【孔紹仁さん】(男性、1917年生まれ) 「1945年、敗戦で日本人がいつせいに逃げ出した後、娘(残留孤児)は道端に捨てられていた。当時、そういう子はたくさんいた。私の友人の劉さんが娘を拾い、あちこち引き取り手をさがした。でも、娘は生まれたばかりだったし、目ヤニだらけで両目がほとんど見えなかった。それで誰も引き取り手が見つからなかった。劉さんは困り果て、私のところに連れてきた。

私も最初、あまり引き取りたくなかった。目が見えないようだし、息が荒くて高熱もあり、とても育つと思えなかったからだ。でも、そうだからこそかわいそうだった。それに当時、うちの妻は男の子を亡くしたばかりで、母乳が出ていた。劉さんも、『かわいそうだろ。あんた、お乳が出るんだから頼むよ。誰も引き取らないと、この子は死ぬしかないよ』と一生懸命に私達を説得した。

捨てるのは簡単だ。でも、やはり命は助けなければ…。当時の気持ちとしては、とにかく育てるしかない、という感じだった。まあ、どの国の子とか考えず、救命という感じだね。私は、子供を捨てて逃げた日本人のことを冷酷とは思わない。逆に、一番賢明だったと思う。捨てなければ、まちがいなく皆、死んでいただろう。捨てたからこそ、子供達は生きられたのだ。」

【瀋鳳賢さん】（女性、1924年生まれ） 「日本の侵略時代、日本人の警察官（当時、「満州国」の警察官には日本人が多数いた）が私を殴り倒し、私のおなかを蹴った。私は大出血して流産した。後から思えば、あれ以来、私はもう子供ができない身体になったのだ。でも私は、日本人にあれこれ言うつもりはない。日本人が全員、乱暴で暴力をふるったわけではない。当時、日本人が侵略しにきたのも、日本政府・国が派遣したからだ。一人一人の日本人が悪いわけではない。

日本敗戦の当時、長春市内は、逃げ出そうとする日本人で大混乱だった。あちこちで死んだり、ケガをした日本人を見かけた。多くは女性と子供で、すごくかわいそうだった。ある日、知り合いの楊さんがリヤカーを引き、その上に1歳くらいの日本人の子供が横たわっていた。楊さんは、『かわいそうでしょ。あんたが引き取ってよ。もし誰も引き取らなければ、また道端に捨てるしかないよ。そうしたらその子は餓死するかもしれない』と言った。私はたまらない気持ちになり、その子を引き取ることにした。

私は、子供を置いて逃げた日本人の親を非難するつもりはない。日本人の親も、手放したくて手放したのではない。でも当時は、そうしなければ子供が生きられなかったから、仕方がなかったのだ。当時の状況を知っている人なら、誰でもそう思うだろう。

日本人の子だからといって、つらくあたってたことはない。そんな心はまったく起きなかった。子供に罪はないし、育てなければ死んでしまうのだから。日本人とか何人とか考えず、ただ私の娘だと思って育てただけだ。私は母親だからね。」

二人の言葉からもわかるように、養父母達が日本人の子供を引き取ったのは、日本と中国の「国民」としての友好や連帯のためではない。ボランティアのような社会貢献でもなければ、中国の民族文化や人権思想の学習の成果でもない。彼・彼女達はただ、目の前にある命、特に子供の命を守らなければならないと考えた、ごく普通の人々だった。「敵国の子供なのに育てた」などということさらに言うのは——養父母を非難するためでなく、養父母を賛美するためであっても——、養父母自身の価値観や人生観を歪めるナショナリズムでしかない。

したがってまた養父母達は、逃げ惑う日本人、特に女性や子供達を、決して「戦争の加害者」とは見なしていなかった。むしろ日本人も中国人も、庶民はつねに戦争の「被害者」だと考えていた。近年、「良心的」な日本人の中でも「日本人としての戦争の加害責任を重視しなければならない」といった論調が見られる。でもそれは、養父母達の考え方とは明らかに違う。養父母達は国籍や民族よりも、同じ人間であり、また同じ庶民（下層階級）であり、同じ戦争の被害者であることの方を、ずっと重視していた。私はこれを、とても大切な階級的視点だと考えている。